



2024 年

11 月 第 3・4 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 11 月 17 日 : ルカ福音書 19 : 1 - 10 .

『 今日この家に救いが 』

・ 11 月 24 日 : ヨハネ福音書 17 : 1 - 5 .

『 永遠の命のために 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

《 今日この家に救いが 》

イエスはガリラヤを出て南下し、エルサレムの手前のエリコの街に立ち寄った際に、物乞いをしていたバルティマイの視力を回復させますが、前後して徴税人の家にも宿泊することになる日のエピソードです。これはルカ福音書にのみ掲載されています。いずれも人生最後の過越祭前の、キリスト自身の受難週の直前の出来事です。イエスは悲嘆に暮れることもなく、誰彼構わず人との出会いにおける愛の業に励んでいます。

エルサレム入城のひとつ手前のこの“エリコ来場”の際にも、やはりイエスは群衆に囲まれて進退窮まることも多々ありました。その時、盲人だったバルティマイと同じく、イエスの姿が見えなくて困っている人物がいます。その理由は“目”ではなく“背”です。最前列に行くことの憚られるこの人物は、先回りをして木の上でイエスを待ち構え、生い茂る枝葉の隙間から来訪者を垣間見るという手に出ます。彼が憎き徴税人の頭（かしら）であることを納税者たちは、よく知っていたからです。彼を介してローマに納める重税は、誰にとっても不愉快なものでした。エリコにはユダヤの有名な建築家でもあったヘロデ大王が手掛けた競技場や劇場、遊技場といった遊興施設が立ち並び、多くの商店や飲食店が軒を連ね、この街から多額の税金が巻き上げられていたのは周知の事実でした。

以後、歴史上何度も廃墟となったこの街が、20世紀にまた新たに復興したのは、イスラエルの建国にともない居住地を追われ、行き場を失ったパレスティナ難民の入植によるものでした。

さて、ナザレのイエスの風聞は、古代都市のエリコにも鳴り響き、張本人の到来により、街は一気に盛り上がります。その時、人知れず木に登り、枝葉の隙間から評判のナザレ人を確認した徴税人の名はザアカイ（ザッカイ？）といいました。彼がイエスの姿を目に焼き付けようと思ったその瞬間、木の上に隠れたザアカイを発見（？）したイエスは、なぜか未知なる彼の名を呼びます、

（そこに隠れている）ザアカイ、急いで降りてきなさい。今日はあなたの家に泊まることにしている（のだから）。 （19：5）

一目でも見てみようと思つて木によじ登っていた徴税人の頭（かしら）は、今度は言われるが儘に、そこから下りてきて自分の家に案内しイエスを迎え入れたのでした。

一方、通りに出て堂々とイエスを歓迎していた現地の人々は、このとき一斉に幻滅を味わいます。評判のイエスが、罪深い人物の“家”に逗留しようとしているのを訝ったからです。不信感を募らせその場（家の前？）に立ち竦む彼らをよそに、イエスはザアカイの、前代未聞の告白を聞き届けることになります。

主よ、私は資産の半分を貧しい人々に施します。不当な取り立てが発覚すれば、誰であれ四倍にして返します。（19：8）

すると、イエスは応じました。

今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。

（19：9 - 10）

ザアカイは、視力を取り戻した同地のバルティマイのようにイエスの後に従って一行に合流することはありませんでした。エルサレムと同様に程なくローマ軍に蹂躪され、破壊し尽くされるこの街は、4世紀以降は廢墟となり、そこにいた人々やイエスが泊まった“家”も、跡形もなく消失したものと想われます。

《 永遠の命のために 》。

「私が彼ら（11人の弟子たち）の内におり、あなたが私の内におられるのは、彼らが完全に一つになるためです。こうして、あなたが私をお遣わしになったこと、また、私を愛されたように、彼らをも愛されたことを、世が知るようになります… 私を愛してくださったあなたの愛が彼らの内にあり、私も彼らの内にいるようになるためです。」

（ヨハネ福音書17：23…26）

この言葉をもって、ヨハネ福音書の17章が終り、次の章(18章)の始めに、イエスは弟子たちと共に最後の晩餐の家を出て、ギドロンの谷の向こうに赴いたことが記されています。イエスが「話し終えた」からだ。17章は全てイエスの話し言葉となっていますが、この“話”が天を見上げて「(天の)父よ…」という言葉から始まっているので、その全体は、形式や内容からして、イエスの“祈り”であることを読者は悟ります。

さて、このイエスの“祈り”の最終目的が、「永遠の命を与えるため」であることが示されますが、その状況設定が念を押して長々と語られ(祈られ)ます。父なる神と子なるキリストの聖なる“連携”が、そのまま、子なるキリストと弟子たちとの連携へと継承され得ることが、その場の弟子たちの耳にも示されているのです。全てが一つとなるためにと。

四福音書には“永遠の命”という言葉が25回出てきます。マタイに3回、マルコに2回、ルカには3回ですが、最後のヨハネ福音書にはなんと17回も出てきます。ヨハネがいかにもこの言葉にこだわりを持ち続けたかがよくわかります。17章の3節にこの“永遠の命”の秘密が開示されます。

永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたがお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。

これが先ず、他ならぬイエスの弟子たちに示されたのが、ことの始まりでした。永遠の命とは“知ること”なのだと。知ることを通してこそ享受する(存在する?)“命”なのだと。

福音書記者のヨハネの目には人の世で“永遠の命”を語り聞かせるイエスの姿がとても印象的だったようです。

21世紀に生きる人類は、遺伝子情報が途切れない限り、生きとし生けるものに永遠の命(もどき)が存続することは知って(?)います。ただ、“遺伝子”という概念規定の無い古代の人間にも先祖代々、子々孫々の存在理由は理解できましたし、これをイエス・キリストが語った“永遠の命”と混同する者はいなかったようです。

キリスト教会は、神の愛、贖罪ばかりではなく、“永遠の命”についても、もっと臆せず宣教すべきなのかもしれません。